

桑野塾

桑野塾 検索

<http://deracine.foo.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。
どなたでもご参加いただけます。
それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

第24回

2014年
6月14日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 早稲田キャンパス16号館 612号室

- ★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。参加無料。
- ☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)
- ※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく事前にご連絡いただくと助かります。
- ※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。



「新レフ」と中国

はるな あきら
報告者: 春名 徹

1935年東京生まれ、東京大学で東洋史を学ぶ。中央公論社で編集歴21年と3か月。その後、短大の先生とかやりました。著書に『にっぽん音吉漂流記』(晶文社)『北京——都市の記憶』(岩波新書)など。

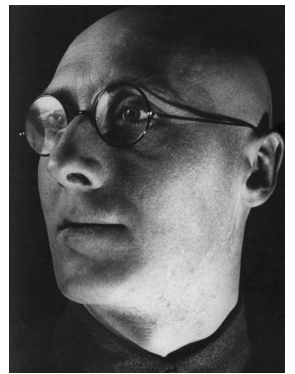
セルゲイ・トレチャコフと『吼えろ支那!』の場合

1920年代後半、革命期のソビエトから見た中国の姿とは……



トレチャコフ『吼えろ支那!』表紙
(1926年、モスクワ)

北京大学のロシア語科の創設者であり、レフや新レフの詩人、評論家であったセルゲイ・ミハイロヴィッチ・トレチャコフ(1892-1939)。彼は自分の学生だったある中国青年の聞き書き伝記『鄧借華——中国の命運』によって同時代中国の息吹をロシアとヨーロッパに伝えた。またブレヒトの中国情報の主な提供者でもあり、その詩『中国よ吼えよ』のイメージは、メイエルホリド劇場の同名の劇を生んだ。その「РЫЧИ, КИТАЙ」=『吼えろ支那! (砲艦コクチフェル)』=『怒吼吧中国!』における帝国主義の象徴として観客にのしかかる大砲のイメージは、明らかに『戦艦ポチョムキン』の影響を受けており、日本で、中国で広く上演され、当時の対中国非干渉運動すなわち「支那から手をひけ!」に大きく影響を与えたのである。



セルゲイ・トレチャコフ
(1892-1939)

蜂起する中国のイメージは、一方でブレヒトの『トゥーランドット』『セチュアンの善人』『メ・ティ』へ、他方で新感覚派の横光利一『上海』、ソビエト映画『上海ドキュメント』や亀井文夫の『上海』の名高いトラックショット、そして佐藤信の『ブランキ殺し上海の春』へと通底する。このようなトレチャコフのヴィジョンを通じて同時代中国の意味を考えてみたい。



『新レフ』表紙(左・1927年4号/右・1928年3号)

* レフ(«Лез»=芸術左翼戦線、1923~25年)/新レフ(«Новый Лез»=新芸術左翼戦線、1927~28年):いずれもロシア(当時はソビエト連邦)の雑誌。
* 本文中ではあえて歴史的な用語として「支那」を用いました。